

近きに在りて

—近現代中国をめぐる討論のひろば—

第 21 号

巻頭の辞——中国の宝……………	1
工部局電気処の停電問題—1925年7月6日前後—……………金 丸 裕 一	3
馮国璋と「南京会議」……………鄭 健 宰	23
河上肇と孫文……………一 海 知 義	35
陳翰笙氏に対するインタビュー	
—中国工業合作運動を中心に—……………菊 池 一 隆	42
〔研究動向〕	
最近の近現代中国経済史の研究動向	
—久保亨『中国経済100年のあゆみ』をてがかりとして—……吉 田 滋 一	54
『近現代東北アジア地域史研究会』の発足について……………	62
〔討論のひろば〕	
辛亥革命80周年記念国際学術討論会(武漢)参加記……………石 川 楨 浩	64
辛亥革命80周年記念東京国際学術会議参加記……………金 衡 鍾	72
上海建城700周年「城市研究与上海研究」国際学術討論会	
参加記……………金 子 肇	77
近代上海社会史研究一瞥	
—「城市研究与上海研究」国際学術討論会に参加して—……帆 刈 浩 之	82
〔資料探訪〕	
私の中国遊学220日間……………萩 原 充	85
台湾・中央研究院近代史研究所档案館……………金丸裕一・	91
—簡史・概況と閲覧指南—……………莊樹華・姜正華	
外務省外交史料館所蔵史料利用手引き……………松 重 充 浩	107
〔故人追憶〕	
高橋勇治先生を悼む……………中 村 平 治	117
〔書 評〕	
小峰和夫『満洲一起源・植民・覇権』(御茶の水書房, 1991) ……岡 部 牧 夫	119
編集後記……………	126

1992・5

謹
呈

陳
翰
笙
先
生

後
菊
池
一
隆
様
上

陳翰笙氏に対するインタビュー

—中国工業合作運動を中心に—

菊池 一 隆

I はしがき

陳翰笙氏は高名な経済学者であり、『中国農村』派の主要人物として、また大規模な農村経済調査を行なった人物としても著名であるが、同時に抗日戦争時期、中国工業合作運動（以下、「工合」運動）の有力な指導者として重要な役割を担っていた事実を看過できない。すなわち、宋慶齡を名誉主席とする「工合」国際委員会で対外宣伝をし、「工合」への献金を募集するなどの活動を行なっていた。幾つかの「工合」関係の著作もある⁽¹⁾。これまで、私は「工合」運動の研究を続け⁽²⁾、史料だけでは明らかにならない点を補強し、より立体的に、かつビビッドに「工合」の実態、本質を探究するために、幾つかのインタビュー、もしくは書簡による質問を繰り返してきた⁽³⁾。そうした中で、陳翰笙氏には、是非とも一度はインタビューをしたいと考え続けてきたのである。すでに1983年接触を試みたことがあったが、手続き上の問題からか本人まで伝わらなかった模様で、会うことができなかった。そこで今回の10ヵ月の中国滞在中に是非とも会見を実現させたいと考え、その希望を中国社会科学院に出した。幸いにも、私の受入機関である同院経済研究所には助理研究員として、陳翰笙氏の弟子ともいえる張麗氏（中米経済関係史専攻）がおり、彼女の尽力で長時間にわたるインタビューに成功することができたのである。

ではここで陳翰笙氏の略歴を書いておきたい。1897年江蘇省無錫生まれ。父は清軍官学校卒業

で、秀才。開明的人物で戊戌変法時期は『申報』を流布する努力をし、辛亥革命時期には貴陽で陸軍小学を創設した。母は無錫の富商の娘。1909年陳翰笙氏は長沙の明德中学に入学。ここで歴史教師傅采湘（傅熊湘？ 同盟会員、南社詩人）の影響を受ける。15年「科学救国」を胸にアメリカに向かう。16年ボモナ大学に入学して植物学、さらに地質学を学ぶが、視力の問題から、転じて欧米歴史を専攻す。20年シカゴ大学大学院に進学し、修士論文「中国五口通商と茶葉貿易の関係」を書く。この間ロシア十月革命の影響から、ロシア語を学び、ロシア問題の考察を開始する。21～22年ハーバート大学で東欧史を学び、さらに22年春ベルリン大学に、論文「1911年アルバニア瓜分の六カ国使節会議」を提出、博士学位取得。24年蔡元培の招聘で北京大学歴史系教授となり、欧米通史や史学史を教える。第一次国共合作の下、25年李大釗、于樹徳の紹介で国民党入党。五・三〇事件が勃発すると、李大釗やソ連大使館の紹介で、コミンテルンと連繫。26年『資本論』を学び、マルクス主義経済学の基礎理論を身につける。この頃に宋慶齡、及び鈴江言一、中江丑吉と知り合いになる。27～28年モスクワのコミンテルン農民研究所員。28年帰国後、中央研究院長蔡元培の推薦で、同院社会科学研究所副所長に就任。王寅生、錢俊瑞、孫冶方、秦柳方らの協力を受けて無錫、保定等で農村調査を行なう。33年8月カナダの太平洋国際学会参加。英文著書『中国当面の土地問題』を発表。年末、薛暮橋、吳覺農、千家駒とともに500余の会員による中国農

村経済研究会を創設、第1回理事会主席に就任。安徽、山東、河南の煙草区を大規模調査、後に『工業資本と中国農民』（英文、1946年）を出版。なおこの間中国民権保障同盟に参加。また、スメードレーを通じて、ゾルゲや尾崎秀実とも関係があった模様である。34年冬来日、東洋文庫で研究、『中国地主と農民』（英文、日文、1936年）を出版。35年モスクワ東方労働大学特級教授となる。年末モスクワで王明、康生の紹介で中共入党。36年「太平洋学会」（太平洋問題調査会）の招聘でアメリカに行き、ニューヨークで季刊“Pacific Affairs”の編輯を行なう。38年カナダ各地で「西安事件の真相」を講演。39年5月香港に戻り、7月「工合」国際委員会を組織、秘書となる。なお、同委員会の名誉主席は宋慶齡、主席はB・R・O・ホール（Bishop・R・O・Hall、中国名何明華）、会計陳乙明、委員は、スノー、アレー、プルーイット、鍾秉鋒、鄭鉄如、何東、宋子文ら20数人であった。41年末、香港が陥落すると、桂林に移り、「工合」国際委員会と「工合」研究所で工作を行ない、江西省贛県、福建省漳州等の「工合」を支援した（妻の顧淑型も化学「工合」を組織）。また、進歩人士を団結させ、抗日救国運動に尽力する。同年西双版纳傣族の農地所有制を調査。42（～44）年桂林師範学院欧文系主任。43年桂林のソ連十月革命記念大会で「イギリスの反ファシズム運動」を報告。この結果、国民党のブラックリストに載せられる。44年国民政府軍事委員会による「陳翰笙逮捕の密令」が出ていることを李済深から知らされ、イギリス軍用機で昆明からインドに逃亡する。デリー大学評議員に就任。インド全国史学会に出席。45年9～11月インドの農村調査を行なう。46年6月ワシントン州立大学特約教授としてインド史を教える。10月『中国官僚資本と内戦』を出版。50年周恩来の要請で帰国。51年外交部顧問、外交学会副会長。53年、中印友好協会副会長。56年ストックホルムの世界平和理事会会議出席。66～68年文革により家を差し押えられ、隔離、審査を受ける（68年顧淑型は迫害により死去）。69～71年湖南省茶陵に下放。72年『華工出国史料匯編』（全10巻）の編纂を開始。その後、中国社会科学院顧問、外交部国際関係研究所顧問、中国「太平洋学会」副会長等を歴任したが、83年11月「工合」協会が復活すると、理事会名誉顧問、さらに87年9月「工合」国際委員会副主席に就任している⁽⁴⁾。

インタビューは、陳翰笙氏の北京の自宅で行なわれた。質問内容は①「工合」国際委員会の具体的、かつ詳細な機構と組織、全体人員数、②国際委員会における陳翰笙氏の対外業務の詳細な紹介、③国際委員会と保衛中国同盟との関係、④国際委員会の抗日戦争時期初期、中期、後期における変化、⑤国共内戦期における国際委員会の存在の有無、⑥陳翰笙氏と「工合」の関係、⑦陳翰笙氏の思想、⑧宋慶齡を始めとする宋家三姉妹の「工合」における役割等々について、質問を準備していった。ただ、実際は陳翰笙氏は話す内容をあらかじめ決めておられた様子で、すぐに話し始められた。そのため、私の質問予定とは流れが変わってしまい、詳細に組織や機構等については十分な聞き取りができなかった面も否めない。しかし、宋慶齡、宋美麗ではなく宋霽齡に対する高い評価、アレーの役割、さらに陳翰笙氏がアメリカで「工合」に参加したこと、協同組合論、及び現在の資本主義と社会主義に対する見解等、新事実、斬新な見解を披露、広範囲な事柄に言及、興味深い内容となっており、「工合」のみならず、陳翰笙氏の思想を考察する上でも極めて重要な資料となるものと考ええる。また、同じことを繰り返し話されたり、記憶違いもあると思われるが、完全に重複したもの以外は、そのまま再録し、記

憶違いや疑問のあるところには（？）を付し、そのまま出すことに心掛け、資料価値を高める努力をした。また、録音不鮮明な部分は極力メモで補った。94歳とは思えぬ元気さと、個性的な、かつ魅力的な話ぶりに終始圧倒された。インタビューは90年7月6日、9月12日の両日、計4時間、雑談を含めれば、約6時間にも及んだ（1回目は主要な質問、2回目は不明点等の補充質問を行なった）。ただ、事情によって実際に録音できた部分は3分の1に過ぎず、かつ約束により今回はその1部も割愛せざるをえないが、致し方ないことであろう。

II 陳翰笙氏に対するインタビュー

陳翰笙氏；我々の言う合作社は本当に非常に少ないのみならず、発展させることも容易ではない。私が言いたいことは「工合」のみならず、全て名目だけの「合作社」は合作社ではないということだ。内実と「合作社」という名称が適応していない。「工合」は一般の合作社、すなわち信用合作社ではなく、あくまでも工業の合作社である。私は「工合」についてのみ論じて、他の合作社については論じない。「工合」は国民党時代に開始されたのではない⁽⁵⁾。「工合」だけについて開始から現在までの状況について話しましょう。・・・話が終わった後で問題提起をお願いしたい。・・・本来、中国には合作社がなかった⁽⁶⁾。すなわち工業の合作社もなく、供銷合作社もなく、何らの合作社もなかった。「工合」がなぜ開始されたのかと言えば、国民党がすでに（経済）力量を失っていたからだ。1937年7月日本軍が戦争（七・七事変）を起こすと、蒋介石は南京から漢口に撤退した。同時に日本海軍は中国の海港を封鎖したため、中国工業は非常な困難に陥った。中国の工場の生産物、輸出品は輸出不可能となり、

そのような時、戦闘が開始されたのである。すなわち、37年の日本による侵略である。財政部長孔祥熙⁽⁷⁾は非常な困難を感じた。なぜ困難を感じざるを得ないか。中国の工場は原料を搬入することが容易ではなく、市場もない。中国の大工場はなすべき術を失ってしまったのである。そこで南京（国民政府の指導下？）で工業を発展させたのである。孔祥熙の妻、すなわち宋靄齡は非常に才能があった。37年日本に東北（南京？）が占領され、政治面で蒋介石は倒れたのだ⁽⁸⁾。国民党は力を失った。そこで南京から四川省重慶へと逃亡したのである。・・・私がこの問題について語ったことは少ない。多くの中国人もこの問題を知らない。・・・37年初頭、蒋介石は政府を南京から重慶に移す準備をしていた。当時、沿海地区一帯は外との関係がなくなり、中国の工場、工業は市場がなく、原料もなかった。この時、政府財政も非常な困難に陥っていた。生産も行なえず、財政も困難。そこで、政府首脳は極めて焦っていたのだ。何ら打つ手がなかったのである。かかる状況下で宋家三姉妹の1人、宋靄齡は非常に才能があった。彼女は中国の状況、中国の歴史を理解しなければならないと考えた。・・・「工合」の歴史について私は今まで日本の友人に話をしたことはない。しかし、今、話すべき時がきた。・・・繰り返すが、当時、工場生産はできず、原料は幾つかの外国に頼り、市場も小さく、政府は困難に陥っていた。孔祥熙は財政を管轄していた。しかし孔は才能がなく、ただ妻を恐れていた。つまり、彼の妻、宋靄齡が南京から漢口へ、さらに重慶に行く準備をするようにとの意見を提起したのである。

37年7月中国工業を振興させるために、宋靄齡は適任者として上海にいたニュージーランド人レウィ・アレー（Rewi Alley）を探し当てた。アレーは、第一次世界大戦後、フランスの戦線

からニュージーランドに帰国していたが、その後中国に来て、上海の工場工部局顧問となっていたのである。アレーは工場の実態をよく知っていた。ただし、アレーは上海の工場と関係があったのみならず、延安の共産党を援助していた。上海のアレー宅にある無線器によって延安と交信していたのである。そこで延安に行こうとする外国人は全て、まずアレーの所に行ったのである。ただ、実際のことを言えば、アレーは工場や工業の運営についてはあまりよく解っていなかった。彼は外国人であり、また心から中国を援助してくれた。そこで上海の工場はアレーに顧問を頼んだのである。ただアレーと共産党との関係を知らなかった。

ところで、37年7月南京の人々は内地に行くべきであった。上海の人々もまたそうしなかった。ただ、アレーは上海から漢口に行き、さらに重慶に行こうとしていた。丁度、宋靄齡も漢口におり、彼女はアレーと相談する機会を得たのである。宋靄齡は次のように言った、「あなたは中国人ではなく、ニュージーランド人であるが中国で我々を援助してほしい。今、戦争中であり、沿海の工場を運営することはできず、工業がない。商業もない。我々はなすべき術がないのだ。工場を内地への移遷は行なわなければならないが、大規模工場を運営できず、できるのはただ小手工業と半手工業の運営だけである。

・・・現在どのようにすればよいのか。・・・中国の工場の生産物には出路はなく、輸出もできないでいる」。つまり、孔祥熙の妻はアレーに、小工場を運営しなければならず、大工場は運営できないと、極めて鋭い口調で主張したのである。宋靄齡にアレーを紹介したのは宋慶齡である。宋慶齡が、宋靄齡に彼に対して自分の考えを示すように勧めたのである。宋慶齡はアレーを紹介しただけで、話の内容とは無関係である。アレーは小工場を運営するならば、合作

社経営にするのが最もよいと考えていた。アレーは工業の合作社、すなわち「工合」を提唱したのである。その実、アレーは「工合」をいかに組織、運営すればよいのか解っていなかったのである。建議したに過ぎない。その時、宋靄齡は初めて、小工場を運営するためには合作社でなければならず、「工合」を了解せねばならず、その内容を理解する必要があるとのアレーの話を聞いたのである。この時、アレーは「よろしい。我々が『工合』を運営します。政府は1部分の資金を出せばよい」と述べた。宋靄齡がそのことを孔祥熙に伝え、「工合」に賛成させた。このように、中国の歴史と日本の歴史が明確に異なる点は、日本では「武士道」が影響を与え、中国では宋靄齡のように「妻」が大きな役割を果たしたことにある。かくして、孔祥熙は重慶に1つの民間組織たる「工合」弁事処、いわば、「重慶委員会」（「工合」協会）を成立させることに同意した。さらに「工合」促進委員会も設立された⁽⁹⁾。孔は妻の言い分に同意して、政府から資金を出して委員会を援助した。

かくして、「工合」は山西、陝西、さらに河南、四川で運営され始めた。なぜ、運営し始めることができたか。確かに、ある人々は非常に熱心に「工合」を運営しようとした。また、ある人々は投機的に、もしくは資金を得るために「工合」を運営した。この両種の人々は「重慶委員会」に多額の、あるいは小額の資金を要求した。これらの資金源はどこかかというと、①孔祥熙・財政部、②国外、すなわちアメリカ、イギリスからの献金であった。「工合」自体はというと、ある「工合」は二セ物であり、少数のものは真の「工合」であった。この時、蒋介石は健在であり、後に打倒されることになる。「工合」は江西、浙江、広東、広西、湖南。江西、浙江の「工合」はよかった。資金は重慶からの

ものと、1部は本地の民間からの献金である。これは第1段階である。

ところで、「重慶委員会」の責任者は現在まだ元気である。彼はニセ物だ。彼は国民党や自分と関係のあるところのみ資金を渡した。その名は盧広綿といい、東北人である。そこで、当時数多くの「工合」は資金がなく、江西、広東、広西、浙江の「工合」は盧から資金を受け取ることができず、我々が香港で組織した国際委員会から資金を受け取った。

菊池；2点だけ質問したいのですが、よろしいでしょうか。まず1つ目は、一般に「工合」運動においては宋慶齡、あるいは宋美麗の役割が高く評価されていますが、先生は宋靄齡の役割を高く評価しています。宋家三姉妹それぞれの役割をどのように考えればよいのでしょうか⁽¹⁰⁾。2つ目の質問は盧広綿氏に対する話も私のこれまでの研究から、納得のいかない点があり、結局「工合」協会内での資金分配は誰が決定しましたか⁽¹¹⁾。

陳翰笙氏；私は宋靄齡の話をしているのであって、宋慶齡や宋美麗の話をしているのではない。宋慶齡、宋美麗は何ら役割を果たしていない。後に役割を果たした。宋靄齡は国際委員会に参加した2年間のみ役割を果たした。ずっと宋美麗は何らの役割も果たさず、台湾に行った後、初めて役割を果たした（笑う）。・・・「重慶委員会」の資金配分は、当然「重慶委員会」が決定した。盧広綿が「重慶委員会」の書記（？）で大きな力を持っていたのである。そこで資金配分を彼が担当、管理した。この資金の大部分は重慶（国民）政府が与えたもので、小部分は海外からの献金である。アメリカ、イギリス、オーストラリアであり、またインドネシアからのものは全て華僑からの献金であった。第1の問題は、状況が変化したことである。重慶政府は力量を行使できなくなった。政府は資

金がなく、地方を管理することができなくなった。第2の問題は、蒋介石が倒れたことである（？）。その時、盧広綿が権力を握った。江西、浙江、広東、広西の「工合」は資金がなかった。政府の1部分の資金は江西に支給された。「江西合作委員会」（「工合」東南区弁事処？）には陳・・・名前の方は忘れたが、陳という孫科の甥がおり、浙江、江西の「工合」を管理していた。・・・彼は国民党員ではない。・・・彼は献金を江西、浙江、広東、広西、香港の比較的良い「工合」に使用した。献金を、全てこの地方で使用したのである。

これで私はやっと、第1期を話し終えた。第2期はこれと異なる。なぜなら、蒋介石が権力を失い（？）、孔祥熙も金がなかったからである。そこで「工合」は従来よりも国外からの援助に頼らざるを得なくなった。宋慶齡は上海から香港にきた。香港の国際委員会は重慶（「工合」協会）とは無関係の別組織である。同委員会には中国銀行香港分行長、レウィ・アレー、さらに、イギリス人ビショップ・ホール、そして私もいた。私は秘書であった。我々は通訳を書き、海外に中国内地、すなわち江西、浙江、湖北等の「工合」の状況を知らせ、献金を募ったのである。ところでアレーが「工合」運動で果たした役割は非常に大きいものであった。まず第1に、前にも言った通り、彼は上海で工場顧問をしており、工業方面の事情に通じていた。第2に、海外で名声があり、海外で募金を集めるのが容易であった。アレーは民主を論じ、「实事求是」だったのである。このように、アレーは海外からの献金を集める上で大きな役割を果たしたといえる。彼はアメリカに大変多くの友人を持っていた。アメリカには中国「工合」支援の委員会も設立された。そこで献金はアメリカからのものが多かったのである。では何故、アメリカは「工合」に興味をもち、熱心に援

助したのであろうか。それには理由がある。なぜなら、アメリカは日本の侵略により大損していたからだ。

日本軍が南京、漢口に至った後、アレーは西北方面、すなわち延安、西安付近の「工合」を運営したのである。これらの合作社は実は「合作社」とは言えない。工業の「合作社」ではなく、手工業工場である。なぜなら真の「合作社」ならば、社員が自らの資金で運営すべきなのに、「工合」社員は金がない。かくして、「工合」は「合作社」としては有名無実であった。資本がなく、ただ工業の「合作社」という名称があるだけで実質的には「合作社」ではなかった。では資金はどこから来たのか。献金に依拠していたのである。アレーは、西安、さらに重慶の「工合」を援助するため、海外に行き、献金を募ったのである。つまり「工合」は外国からの献金で運営されていたのである。その時から現在まで相変わらずこの種の状況が続いている。実際、小型工場は市場で製品を販売することで自己資金を作るが、市場が十分でないために献金に依拠せざるを得なくなるのだ。これは問題だ。アレーは「工合」が開始される以前、合作社に関わったことがなかった。そこで彼は合作社をいかに運営すればよいかわかっていなかった。ただ、アレーは自分が着る衣服がなくなっても、それを人に貸してやるような人物である。戦争で中国が困っている時、東奔西走して「工合」への献金を集めて、それで有名になった。アレーのお蔭でアメリカの数多くの人々が中国に同情してくれた。その結果としてアメリカからの献金が最も多かったのである。中国は極めて貧窮であり、献金を出せる人間がいなかった。

菊池；アレーの父親がニュージーランドで農業協同組合をやっており、その影響から合作社に対しても、ある程度知識を持っていたのでは

ないでしょうか。

陳翰笙氏；そのことについて私は知らない。農業協同組合と工業協同組合は同じではない。私は中国の「工合」を論じてるのであって、アメリカやイギリスのそれではない。アレーは延安の学校で長時間にわたって講演し、「工合」を運営するように促した。ただ「工合」の運営の仕方については言わなかった。アレーは「工合」組織化を提唱したのであって、いかに「工合」を運営するか知らなかったのである。

菊池；先生はいつ、どのようなお考えから「工合」運動に参加したのでしょうか。また、先生の略歴を「工合」との関連で教えていただけますか。もしできましたら「工合」国際委員会の機構や先生のそこでの仕事を詳細、かつ具体的にお教えいただきたいのですが。

陳翰笙氏；私はまず、最初、中国「工合」援助のアメリカ委員会に参加し、妻（顧淑型）もまたそれに参加した。アレーとは帰国後初めて知り合った。アレー、スノー、そして私の3人は香港で「工合」国際委員会を発起した。（当初？）7人であった。つまり、「工合」のことを知ったのはアメリカであるが、その正確な期日は忘れた。なぜ「工合」に参加したかと言えば、中国の工場が崩壊したが、大工場は行なえないという現実があったからだ。そこで手工業は続けなければならず、ただし従来の手工業ではなく、それを進んだ形で推進するには、指導する委員会を組織するのが最もよいと考えたからである⁽¹²⁾。

私は日本軍が来るまでの2年間、すなわち39、40年香港にいた。我々は香港で「工合」への献金を組織的に集めたのである。私は国際委員会の執行秘書であった。仕事は香港で「工合」のための募金活動をすることである。アレーが、漢口の事情を私に告げ、「工合」を手伝ってくれるように頼んだのが、この仕事をする契機で

あった。私はアメリカに7年間住んでおり、アメリカを熟知しており、知人も多くいた。ドイツにも2年間いた。ソ連にも何回か行き、最も長い時で1年間いた。さらにイギリス、オーストラリア、ニュージーランドにも行ったことがあり、その経歴がかわれたのであろう。日本にも3回行ったことがある。当時、海外からの献金で最も多かったのはアメリカ、次いでイギリス、3番目がオーストラリア、4番目がカナダであり、主にこの4カ国からのものであった。その時、戦闘はまだ終わっておらず、献金を集めるために香港で「工合」国際委員会を組織した。過去に、その時集めた献金は重慶にあり、後に香港に移し、それ以降ずっと香港の銀行に預金されたままであった。預金額は1万5000米ドル。40年から89年まで金は香港国際委員会の管轄下にあり、動かさなかったのである。（傍で聞いていた陳氏の妹曰く「今年、香港から北京くの現在の「工合」国際委員会？」に1万5000米ドルではなく、5万5000米ドル送られてきた」）。彼女の言う通りだ。現在、この献金で「工合」組織化の準備をしているが、まだ実現していない。

今、「工合」は甘肅、西安、上海、その他湖北省洪湖、山東省蓬萊で「工合」を再開しているが、社数として示されていても、名目だけのものもあり、実際活動しているのは6、7割に過ぎない。ただ上海には多くの「工合」があり、また北京の切紙細工の「工合」は生産物を海外に輸出している。とはいえ、「工合」の前途は決して楽観できない⁽¹³⁾。あなたはその原因が知りたいですか。「工合」参加者が自ら資金を出すことであり、これが真の「合作社」である。しかし、相変わらずそれができないでいる。・・・（録音を止められる）・・・ところで抗日戦争時期、「工合」が役割を果たしたのは僅か2、3年だけである。幾つかの地方、例えば、江

西、浙江、広東・・・、その他の地方は論ずるに足りない。抗日戦争が終わった後は、全て国民党官僚が「工合」を行なっており、民間のものではなく、偽りの物であった。40年以後、90年に至るまで、全てが偽りの物であった。現在の「工合」に対する資金援助はニュージーランドが最も多かった。ただ、アレー死後、ニュージーランドやオーストラリアからの資金援助は減り始めた。

私は自伝『四個時代的我』を文史出版社から出版している。もし私の過去の状況を知りたいければこの本を読めばよい。

菊池；過去、および現在の日本資本主義の問題をどのように考えますか。

陳翰笙氏；過去も現在も日本は資本主義である。ただ、アメリカと対立した。今も対立している。とはいえ、45年以前の日本資本主義と、それ以後の日本資本主義は大きな違いがある。現在、日本資本主義は発展し、アメリカは日本を相手にできなくなった。日本の優位点は軍事力に比例して、国が強いということである。また、商業力も強い。現在も相変わらず軍事力も強い。どうしてそのように言えるのかといえ、日本は軍事面でよい伝統があり、秩序、効率、規律を重んじている。その上、日本資本主義は若く、腐敗が少ない。アメリカは腐敗が進んでいる。私の座右の銘は「過猶如不及」（過ぎたるは猶及ばざるが如し）、「欲速則不達」（急ぎ過ぎると目的に達せず）である。現在、日本の資本力は非常に大きい。ヨーロッパにおけるその影響力も非常に大きい。ただ、日本はあまりに急いで頭角を出そうとしすぎる。日本の資本に出路はない。その資本は十分でなく、かつ良くない。出路がなければ良くないと言えるのではないか。これも「過猶如不及」だ。

ところで、あなたは中国「工合」の歴史的教訓が解りますか。当時「工合」以外に、その他

の「合作社」は運営できず、今も中国では「合作社」を運営できない。つまり、戦争時期か、戦争時期でないかにかかわらず、中国では基本的に「合作社」が運営できないのである。繰り返すが、戦争、平和とは無関係だ。ところが「工合」は戦争時期運営できたのに、現在運営できないところに問題がある。抗日戦争時期、「工合」のある部分は成功した。ある部分は失敗であった。3分の1が成功したのだ。これは私の見解だ。あなたは「工合」にどのような感想を持っているのですか。

菊池；まず、「工合」運動は日本の「非民主的」侵略に対して「民主」を用いて対抗した。これは非常に大きな意義だと考えています。第2に、「工合」運動は国民党、共産党に一種の「民主的」方法を教える役割を果たした。第3に、これは「工合」に限らないことですが、中国の合作社は将来、中国経済と台湾経済を結びつける働きをする可能性があると思われます。

陳翰笙氏；第1に、日本の中国侵略は日本資本主義発展の結果であって、それ以外の理由はない。第2に、「工合」は国共両党を教育したことはない。あなたは解っていない。譬えて言えば、共産党は8歳、国民党は5歳。どうして教育などできるというのか。あなたは「養老院」がどのようなものか知っているのですか。現在、皆社会主義を論じているが、彼らも解らなければ、我々も解らない。第3についてはあなたの言いたいことが解った。合作社形式は資本主義から社会主義への過渡的方法と言いたいのでしよう。

菊池；合作主義者の使うそうした旧来の意味ではありません。現在の分断国家、例えば、資本主義の韓国と社会主義の朝鮮民主主義人民共和国、社会主義の中国と資本主義の台湾の間の紛争を抑えながら、同時に社会主義、資本主義に共有する合作社形式を用いて連合させること

ができる。さらに連合した後も、政治、経済面での再建過程で合作社同士の協力が一定の効果を発揮することができる。

陳翰笙氏；ほー。私の見方は金日成は二セ物であり、表面的には、権力を持っているが、実際的にはなんらの権力もない。「張子の虎」である。南朝鮮は資本主義、北朝鮮は二セの社会主義で、封建主義である。南朝鮮は前へと発展して、北朝鮮は後へと「退歩」している。後へと後退しているのだ。どうして合作社を用いて結びつけることができよう。

菊池；では合作社はどのような条件下で成功できると考えますか。

陳翰笙氏；「工合」運動は資本主義の発展時期に役割を果たすことができる。逆に資本主義が発展しなければ、その役割を果たすことができないのだ⁽¹⁴⁾。なぜ、こうしたことが言えるのか。民間にある程度の資本があり、協同組合運動自体が発展する時、「工合」も発展できるのである。アメリカには南北戦争以前、協同組合があった。アメリカの農村協同組合はすでに農業、商業、工業、手工業が1つに結びついていたのである。これは真の協同組合であった。我々の合作社は譬えて言えば、「弄虚作假」（虚を弄び、二セ物を作った）といえる。アメリカは成功した。カナダも成功している。あなたはちよつと見に行ってくればよい。ただ、アメリカの状況は当時と比較するのは難しい。時代が違う。イギリスの協同組合は現在、影響力を持っていない。ヨーロッパ大陸全体を見ても、協同組合は影響力を持っていない。ソ連でも影響力がない。ソ連の協同組合は二セ物であり、「協同組合」ではない。中国の合作社の多くも同様に、真の合作社ではない。真の合作社は18世紀のイングランドの協同組合で、現在に至るまで当時のそれが真の合作社である。では、なぜ現在アメリカや日本では工業協同組合が行な

えないのか。工業協同組合が競争の側面で公司や工場に及ばないからだ。歴史的に言えば、アメリカにも独立戦争前、工業協同組合があった。南北戦争時期、アメリカ農村には工業、商業の協同組合が存在したこともある。日本で工業協同組合が運営できない理由は2つある。(1)日本は工場が非常に多く、工場資本も厚く、力量が大きいので、工業協同組合を必要としない。(2)日本の必要とした協同組合は工業協同組合ではなく、主に農業協同組合であった。日本の「武士」は第一次世界大戦後、農村に行き、工作を行ない、金融を管理し、協同組合（産業組合）を管理した。日本は工業協同組合はなかったが、農業は発展し、農作物、工業品の輸出は増大した。特に日本の米はそうである。オーストラリアは日本の・・・録音不明瞭・・・を援助した。オーストラリアは日本の工業品を買おうとしたし、さらに日本は米も輸出した。すなわち、国家間の経済関係は政治関係と相関関係にある。経済関係が政治関係に影響を与えるのである⁽¹⁵⁾。

菊池；先程から「真の合作社」「二セの合作社」という言葉がありますが、概念がよく解らないので教えてください。「真の合作社」とはいかなるものを指すのでしょうか。

陳翰笙氏の妹；いわゆる「真の合作社」とは主に①社員の自己資金、②社員の自己労働、③民主選挙、④公平分配の原則を実施している合作社である。この四大原則に合うものが「真の合作社」なのである。「工合」に関して言えば、工業発達の国家では「工合」を必要としない。この種の生産合作社は小工業であり、大規模なものではない。小型の方がよく、人数があまり多いとうまく運営できない。兄の観念は私達と異なる。なぜなら、兄の観念は1930年代のもので、現在と客観的条件が同じではないのだから。当時、失業者が極めて多く、農村も窮乏

していた。そうした条件下で「工合」組織化の必要性は高く、それを組織することは大変容易であった。私も「工合」の労働に参加することで、家族を養うことができたのである。当然、私の参加した「工合」は四大原則に則っていた。今はそうはいかない。客観条件が異なる。生産合作社というものは民間主導型でやると、かなりうまくできる。ところが現在は「工合」自身が全てを決定することは難しく、その結果「工合」を運営することは極めて困難なのである。1つは客観的条件の問題、1つは人々の意識の問題である。

菊池；先生の最近の生活等についてお教えてください。

陳翰笙氏；私はまだ聞くこともできるし、論じることでもできるので毎年1編の文章を書いている。1人の女性、今年76歳の国文の教師であるが、私の話したことを筆記するなど手伝ってくれている。私の目はあまり見えなくなって2年になり、神経も萎縮している。彼女は友人の妻であるが、文章を読むなど援助してくれているのである。毎年1編の文章を雑誌『群言』⁽¹⁶⁾に出している。今年も1編出した。題は「道德教育」である。中国の道德はよくない。ところで、あなたは「工合」に関する著書を出版するつもりでしょうか。題名はどうしますか。

菊池；本の題名は『中国工業合作運動の研究』とするつもりです。サブタイトルは「中国における先駆的協同組合の一形態」を考えています。

陳翰笙氏；その題名はよくない。「研究」という言葉は曖昧である。『中国工業合作運動始末』とした方がよい。なぜなら、「工合」運動は抗日戦争時期に大きな意義をもったが、今はない。終わってしまったのだ。今の「工合」は研究する価値がない。

菊池；「始末」は日本の専門書にはあまり馴

染みません。ただ、私は現在の「工合」運動も調べているのは過去の「工合」運動を、より深く理解するための手段のつもりです。当然、歴史専門書です。「史」という文字は入れ、『中国工業合作運動史の研究』とすることにしようと思います。

陳翰笙氏の妹；「工合」組織は現在もあります。ただ、運動形態にまで発展しておらず、かつ宣伝不足だけです。ところで、あなたの本は何年から何年までの「工合」運動を取り上げつもりなのですか。

菊池；1938年から52年までです。私は陳翰笙先生の見解と若干異なり、中国の「工合」運動は抗日戦争時期に抗戦経済建設に大きな役割を果たしたのみならず、現在不振とはいえ、世界的な工業協同組合運動の潮流の中で、中国を含む世界各国の工業協同組合が大きな意味をもつ時が来ると考えています。

陳翰笙氏；それなら『抗日戦争時期における中国工業合作運動の教訓』がいい。

陳翰笙氏の妹；「工合」運動が終わったと考えるとたくないなら、『中国工業合作運動の経験』はどうでしょう。

菊池；著書の題名についてはじっくりと考えていると思っています。本当にいろいろ真剣に御教授をいただき、「工合」運動をまた一步深く知ることができました。大きな刺激を受け、さらに研究に邁進する気持ちになりました。心から感謝致しております。

<註>

(1) 陳翰笙氏の「工合」関係著作は、①『中国工業合作運動的過去与将来』、太平洋学会アメリカ分会出版、1947年。なお、これは元々英文で発表されたものであり、「工合：中国合作社史話」として後述の『陳翰笙文集』にも所収されている。②「工合運動的前途」『

華商報』1941年6月19日、③「工合和建設」『中国工業』第9期、1942年9月、④「目前工合的困難問題」『中国工業』第21期、1943年11月、⑤「工合如何走上正軌」『建設研究』第9卷3期、1943年12月、⑥「發展工業合作社要面向广大鄉鎮」『世界經濟導報』1984年5月28日、その他、⑦「工合運動的意義及其前途」が、張法祖『工合与抗戰』（星群出版社、1941年2月）の陳翰笙序文として出されている。また、妻の顧淑型も「中国婦女手工業的前途」『香港大公報』1939年12月13日がある。

(2) 中国工業合作運動については、拙稿①「抗日戦争時期の中国工業合作運動」『歴史学研究』485号、1980年10月、②「遊撃地区における中国工業合作運動」『中嶋敏先生古稀記念論集』上巻、同12月、③「雲南省における中国工業合作運動」、大阪教育大学歴史学教室『歴史研究』24号、1987年2月、④「東南区における中国工業合作運動」『社会文化史学』23号、同3月、⑤「中国工業合作運動と救国会派」『歴史研究』25号、1988年3月、⑥「中国工業合作運動の研究動向について」『東洋史論』7号、1989年11月、⑦「陝甘寧辺区における中国工業合作運動」『東洋史研究』49巻4号、1991年3月を参照されたい。

(3) これまで発表したインタビュー、書簡等については、①「中国工業合作運動について—レウィ・アレー、盧広綿両氏に聞く」『アジア経済』21巻5号、1980年5月、②「中国工業合作運動の起源と現代的意義—ニム・ウエールズ女士からの書簡を中心に」『中国近現代史論集』1985年、③「中国工業合作運動指導者からの書簡について」『歴史研究』23号、1985年9月、④「現在の中国工業合作運動について—盧広綿氏に聞く」『季刊中国研究』11号、1988年4月、⑤「中国工業合作運動指導者に対するインタビュー」『歴史研究』29

号、1992年3月。⑥「西北区工業合作運動関係者に対するインタビュー—抗日戦争時期、国共内戦期、そして現在」『アジア経済』33巻5号（1992年5月）に原稿提出済。

(4)①陳翰笙『四個時代的我』中国文史出版社、1988年、②汪熙、楊小仏主編『陳翰笙文集』復旦大学出版社、1985年、③吳友文、田野「陳翰笙事略」、中共中央党史研究室編『中共党史資料』第35輯、1990年9月、④三谷孝「抗日戦争中の『中国農村』派について」、小林弘二編『中国農村変革再考』、アジア経済研究所、1987年、⑤同「中国農村経済研究会とその調査」、同編『旧中国農村再考』1986年等参照。この中で陳翰笙氏自身を知る上で一級資料といえるのは、やはり自伝①であろう。これには年譜も付されている。②は陳氏の論説を掲載、史料価値があり、かつ末尾に著作目録があり、参考になる。③は日本人等の関連などの新事実にも論及され、興味深い、あまりに中共との関連が強調され過ぎ、25年段階で中共に入党した（「陳翰笙参加中国共産党」）かのような錯覚を与え、使用に一考を要す。④⑤は中国農村経済研究会、『中国農村』派の実態、意義を解明した労作で同時にそれとの陳翰笙氏との関連、陳氏の役割を知る上で、有益である。なお、陳翰笙氏自身の話によれば、文化大革命時期は批判され、2年間拘禁された時、視力が悪化した。ただ、殴られたりすることはなかったという。最初、紅衛兵が来た時、楊翰笙に間違えられたといていた。

(5)「国民党によって開始されたのではない」という意味であろうか。

(6)張法祖の前掲書の序文「工合運動的意義及其前途」（9～11頁）で陳翰笙氏は、「工合」を評価、信用合作社を厳しく批判し、以下のように述べている。すなわち、前者の主要

目的が生産にあり、生産者自身の運動で、生産者の利益となり、搾取が発生しないのに対し、後者の重点が資金貸付で借金返済や小作料納入に当てられたり、生産に使用されない例が多くあり、間接的に生産者を搾取することもあるとする。

(7)孔祥熙は、33年4月中央銀行総裁、11月行政院副院長兼財政部長、七・七事変後、行政院院長（すぐに副院長に戻る）、財政部長、中央銀行総裁。45年これらを辞職（劉紹唐主編『民国人物小伝』第1冊、1975年、22～23頁参照）。

(8)何を意味するのか不明。陳翰笙氏は、蔣介石の南京からの後退により、実質的権力を失ったと見ているのかもしれない。

(9)「工合」促進委員会（「工合」促進社）は、香港、上海、マニラ、ニューヨーク、ロサンゼルス、ロンドン等で設立され、この中枢として機能したのが「工合」国際委員会である（前掲拙稿「抗日戦争時期の中国工業合作運動」と「中国工業合作運動指導者からの書簡について」）。

(10)「工合」国際委員会等における陳翰笙氏と宋慶齡の関係から、当然宋慶齡に対する種々の事実や意見が述べられると考えていた。宋慶齡に対する評価は予測を越えるものであり、今後、実証的に考察する必要がある。

(11)抗日戦争時期、「工合」協会それ自体の資金も不足気味で、それを如何に分配するかが大問題であった。その際、西北地方の「工合」に重点を置く盧広綿氏と、西南地方の「工合」を重視しようとする陳翰笙氏の間で、資金配分をめぐる意見の相違があったことは十分に予測しうる。ただ、一般的に盧、陳両氏の関係は「工合」復活の際も、また復活した現在の「工合」指導に対しても共同歩調をとり、会議等でも同席することが多く、良好と

見られている。因みに、盧氏の陳氏に対する評価は極めて高い。現在、上海、河南、甘肅省山丹を除いて「工合」が伸び悩んでいることもあり、将来に向けての指導、見通し、「工合」の「民間性」「自立性」の保持の問題、資金不足の打開策、国家との関係等をめぐり、意見の対立がある可能性もある。また、双方とも、協同組合主義者として極めて柔軟、かつ大胆な発想はするもののマルクス主義をベースに置く陳氏、キリスト教社会主義的な盧氏との間の思想的齟齬も考えられないことはない。

- (12)前掲序文(1頁)の中で、陳翰笙氏は「日本人のスローガンは『工業日本、農業中国』であった。だが、建国の道は工農が並重されねばならない。いかなる民族も、進歩した工業がなければ、独立できない」とする。
- (13)抗日戦争当時、陳翰笙氏は「工合」に「民主的生産組織」で「民主政治の実験所」(前掲「工合運動的前途」)との位置づけを与え、「官庁と法律の力で、地方の(工業)合作運動に反対する旧勢力を阻止し、合作事業の障害を排除することは当然可能」であるが、「もし行政力で人民に合作社組織への参加を強要するならば、それは反合作、反民主の道を進むものであり、かくして組織された合作社は行政組織と何ら異ならないものとなり、却って土豪劣紳等の農民搾取のよい機会となるであろう」(前掲序文、13頁)、と警告を発している。このように、民衆の自発性を重んじ、かつ行政による強制、強要には鋭い批判を行っていた。「政治上における民主制度が真の工合運動の保障をなすものである。そこで、反民主勢力が徹底的に排除されない以前、民主精神に富んでいる工合運動には真の光明ある前途はないのである」(同前、14頁)として、「工合」の発展の前提に民主制度

の確立を置いている。この点に関し、私は「逆に『工合』によって民主を生み出し、民主を促進できるのではないか」と質問した。陳翰笙氏は「逆は成り立たない」と即座にいった。

- (14)43年に出している前掲「工合如何走上正軌」で、すでに「合作運動は・・・資本主義発展以後の一つの事業」としており、陳翰笙氏の一貫した考えと思われる。また、同論文では「最近二〇年来、我国でも合作運動を提唱している。まず華洋義賑会の運営する信用合作社、繼いで中国工業合作協会運営の工合社。その最初的心思は賑災救難に外ならず、いわゆる積極的慈善事業である。・・・もし(これらが)合作運動の正道を歩めば、我国の資産化を助ける」と。このように、華洋義賑会の信用合作社と「工合」のみを例として出しているところから見ても、この兩種の合作社に対する陳翰笙氏の評価は高いものと推察される。
- (15)私見によれば、陳翰笙氏の思想は、土台としての経済を重視するなどマルクス経済理論を基底に置きながらも、農村実態調査、実証を重んじ、そこから理論を構築する姿勢を貫き、かつ「民主」「自発」「自立」「反統制」を最重要視する。このようにリベラルなマルクス主義者であり、35年入党以降も第三勢力、民主派に最も近い共産黨員、いわば「共産党内民主派」の位置づけを与えられよう。
- (16)『群言』は北京の《群言》雑誌社から出版されている。現在、私が所有しているのは、1990年第7期(総64期)だけであるが、それを見ると、対外文化交流と翻訳工作、歴史教育と愛国主義の関係、法制との関連で著作権問題、民族文化、科学、随想等が掲載されている。これらから本誌は、広範囲の問題を種々の立場の人が意見を提起する場としての

(84頁へ続く)